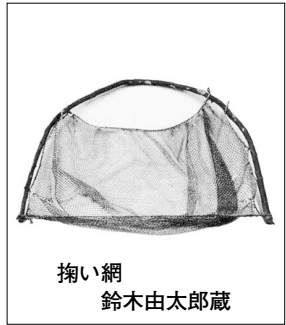


財団だより

多摩川

2004. 3 第101号



掬い網
鈴木由太郎蔵



真姿の池・国分寺市（'03.12.12）

■多摩川現風景■

(57) 湧水

真姿の池湧水群は野川の源流のひとつで環境省の名水100選に指定されている。2003年には「東京の名湧水57選」に指定された。水量も豊で遠方から水を汲みに毎日多くの人々が訪れている。

多摩川流域の多くの自治体では地下水の涵養のため個人の住宅に「雨水浸透枡」の設置を奨励し補助金を支給している。

また、漏出地下水の利用として東京都・JR東日本では2002年3月にJR武蔵野線トンネル地下水を国分寺市姿見の池へ、同年7月にはJR東京駅総武線トンネル地下水を品川区立会川へ、2003年9月にはJR上野駅付近の新幹線トンネル地下水を台東区不忍池へ各々導水し水量の確保、水質の改善に努めている。

行政、企業、住民の協力により多摩川流域の湧水が涸渇することなく後世に残って欲しいと思う。

・関連する財団の研究助成

〈学術研究〉

- ① 野川流域における水循環機構に関する試験流域による研究
1983年 高橋 裕 東京大学 (NO.68)
- ② 多摩川における湧水の涵養機構に関する研究—野川流域の場合—
1985年 高村弘毅 立正大学 (NO.79)
- ③ 武蔵野台地の段丘崖に分布する著名湧水の湧出機構の解明とその保全、並びに環境モニターとしての機能の研究
1993年 新藤静夫 千葉大学 (NO.149)

〈一般研究〉

- ① 「水みちマップ」作成の為の調査研究—野川流域の湧水と地下水の流れの関係について—
1992年 神谷 博 三多摩問題調査研究会 (NO.78)
- ② 国分寺崖線の総合的環境保全のための市民提案型広域行政施策に関する調査研究
1998年 金子 博 みずとみどり研究会 (NO.111)
- ③ 野川流域における「湧水保全モデル」の開発に関する計画論的研究
2003年 神谷 博 水みち研究会 (研究中)

多摩川散歩

■玉川上水誕生350年■

玉川上水ネット事務局 瀬野 誠之

玉川上水は、昨年350歳を迎えました。多摩川の上流、羽村から四谷大木戸までの延長43Kmの人工の水路が掘られたのは江戸時代初期の承応2年(1653)のことでした。着工されたのは4月4日、竣工したのが11月15日と記録にあります。このような短期間で工事がされたことも驚きですが、羽村と四谷大木戸の標高差は92mですから、平均勾配が約500分の一という緩やかなものであることは、当時の優れた土木技術を示すものです。

それ以来、江戸時代から、明治、大正、昭和、そして平成と、玉川上水は江戸・東京の水道用水供給という大切な役目を担い続けてきています。水道水供給という役目だけではなく、玉川上水からの多くの分水は、当時水の乏しかった武蔵野台地を畑にすることを可能にしました。したがって、江戸・東京への食糧供給という意味もあったのでした。

この素晴らしい歴史的遺産を市民レベルでお祝いしようとして、玉川上水を愛する人たちの情報交換の場である「玉川上水ネット」は、「玉川上水の誕生350歳を祝う会」として、4月から11月までさまざまなイベントを行いました。

このような中、昨年8月27日には文部科学省は玉川上水を国の史跡文化財に指定しました。これからは新たな、体系的な保全対策がなされることになるでしょう。

う。たいへん喜ばしいことです。

ただ、いくつかの問題点があります。その一つは、現在、小平(監視所)から下流は多摩川の水は流れていないことです。昭和40年に、多摩川から取水した水全量は東村山浄水場へ送られることになり、以降21年間は「空堀」とか「死に川」と呼ばれる状態が続きました。昭和61年に「清流復活事業」として水が流されたのですが、これには下水処理水を充てています。また、水量が極めて少ないことも問題です。このため、素掘りの法面(土手)が乾燥して崩れ、樹木の傾きも大きくなっています。

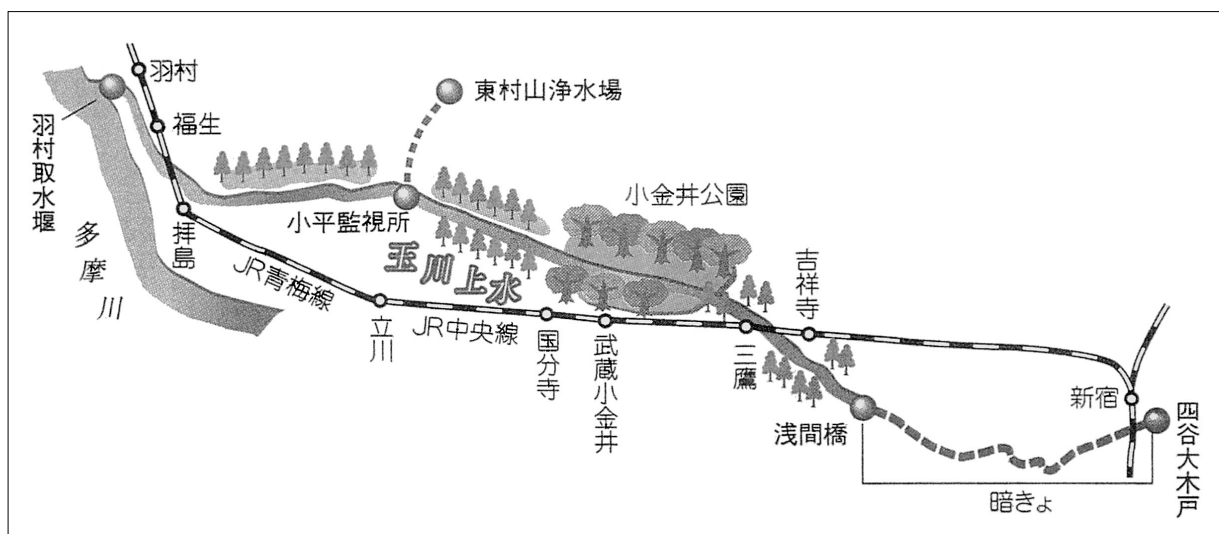
また、もともと玉川上水にいなかった動植物の移入(放流)も目立つようになってきています。昨年秋には武蔵野市の玉川上水に隣接する幼稚園でカミツキガメの孵化(24匹)が発見されました。このほか、どんな外来種が棲息しているのでしょうか?きちんとした調査と駆除などが必要かと考えます。

さらに、玉川上水沿いの道路計画が起っています。歴史と環境を保全する意味から、改めての見直しが必要ではないでしょうか?

玉川上水は、太宰治、国木田独步、下村湖人などの文化人ゆかりの地であり、これらの石碑や建物があります。さらに、小金井市内の玉川上水沿い約6Kmには、地元の方々が大切にしている、江戸時代からの「名勝小金井桜」が800本余りあります。まもなくこの桜が咲き出します。お花見散歩にいかがでしょうか?

「玉川上水ネット」ホームページ:

<http://www.parkcity.ne.jp/~tama-net/>



(図:東京新聞)

私と多摩川



萌芽更新のための下草刈り

八大緑遊会会長 千明 武紀

〈多摩川との関わり〉

私と多摩川という題をいただいて、さて私と多摩川の関わりに、何か特別なことがあったろうかと考えた。私は群馬県利根郡で育った。利根郡は利根川の最上流地域であり、東京の水甕であるダムを五ヶ所も擁している。やがて私は大学生となり上京、世田谷区経堂にある学生寮に入寮した。18歳の春であった。そして4年後には新宿に本社があった会社に就職、その後大体は府中市に住んでいたが、結婚して2児を得た後八王子市に小さな家を建てた。以後茫茫28年を経て子供は成長し私は定年退職しはや4年目である。ここまで振り返ってみてはたと気がついた。上京以来、私は多摩川の水道を頂いて生きてきたのだ。実にこの46年間、私の体の約七割は常に多摩川の水で構成されていたのである。これほど大きな関わりはないではないか。と思ひ至った。母なる川、多摩川のありがたさをしみじみ思うのである。

〈八大緑遊会について〉

さて、ちょうど4年前のことであるが、私は定年を迎えようとしていた。定年後の日々を有意義に過ごしたいと思いをめぐらしていたのだが、折りしも、ボランティア組織八大緑遊会が誕生し、里山の保全活動を開始しようとしており、私は幸運にも活動開

始と同時に参加することが出来た。八大緑遊会は「東京都環境学習リーダー講座」の卒業生の中から、更に1999年「東京都みどりの保全活動リーダー講座」を受講した20名の有志が始めたボランティアグループである。この講座の最後の仕上げが八王子大谷緑地保全地域で行われたことをきっかけに、講師の勧めもあり2000年1月から準備を始め、東京都環境局の方針にも合い、同年4月より大谷緑地保全地域をフィールドとして活動を開始した。その後着実に活動を続けて、現在会員は地元八王子市から多摩地区各市・渋谷区、板橋区などにまで及び50名を越えている。

〈大谷緑地保全地域について〉

大谷緑地保全地域は面積約3万m²、コナラを主とし、クヌギ・サクラ・クリ・ソロ・エゴなどからなる雑木林である。この緑地保全地域の特色は都の方針により、明るい雑木林を維持するために、「萌芽更新」が定期的実施されていることである。萌芽更新のための伐採は2年毎に、1500～2000m²規模で行われており、この冬までに4箇所6000m²に実施されている。全体では20年にわたり10箇所約1万五千～2万m²に実施される計画である。JR八王子駅から徒歩25分という市街地に囲まれた緑地でありながら、萌芽更新が実施されている森は貴重であろう。

〈八大緑遊会の活動内容〉

- ① 保全管理活動（下草刈・間伐・移植等）
- ② 環境学習（小学生や社会人の里山体験学習）
- ③ 調査活動（植生の時系列的な変化の記録等）

〈多摩川の涵養林として〉

大谷緑地のすそを小さな澤が流れている。この澤は残念ながら三面コンクリートの溝になってしまっているが、源は小宮公園の弁天池に流れ込む小川である。そして末は谷地川に入り多摩川へと出てゆく。大谷緑地は3万m²にすぎない。しかしささやかながらも多摩川の良好な涵養林である。このように自負しつつ森の保全に励む日々である。

環境雑感

■財団の30周年に思う■

長井 弘道

第99号で当財団の誕生にまつわる経緯を新井元理事長が書いておられたが、今年の8月が丁度設立30周年にあたることになる。30年前は国全体が高度成長期にあり、それによる公害問題が騒がれ始めた頃であったが、それにしても、多摩川を対象に河川の環境浄化を訴えた先人の着想には驚かされるばかりである。

その財団に縁あって事務局詰めとなったのが昨年の5月のこと。今日まで9ヶ月が経ち、この間見聞きした「多摩川」は、せいぜい全長138 Kmの小さな川に過ぎないのだが、その存在感の大きさには恐れ入っているというのが実感である。源流域での都水道局による100年を超す地道な水源林管理を始め、河原植物、川魚、水生動物、鳥、昆虫たちの保全、これらの生き物や水質、湧水、井戸、水みちなどの調査、用水や化石の歴史の調査、水量の回復や水質の改善、川を活用した福祉活動、水辺の楽校などによる教育、ボランティアによる川や河原の清掃など、実に多種多様な活動が、「多摩川」を軸として行われているのである。ここでは、川を通しての官民協力を目指して作られた京浜工事事務所の河川環境課などの果たした役割も少なくなかったに違いない。いずれにせよ、「多摩川」が今や流域人口約430万人といわれるその多くの人びとに愛されている川であることの証しであろう。

そこで思い起こすのが「地域環境力」という言葉である。'03年版環境白書で初めて使われたもので、個々人の行動の積み重ねや広がりやがては地球全体の環境問題を動かす有力な手立てとなるとし、「グループや地域としての取組み意識の高まり」を地域環境力と表現している。上述した事実に鑑みれば、多摩川流域ではこの地域環境力のポテンシャルがかなり高いことが窺い知れる。そこで、このポテンシャルを更に高揚することによって多摩川流域における生活環境の質的な改善を図ることを提案したい。

私の持論では、多摩川には2つの大きな課題がある。一つは、都の唯一自前の飲料水源として、都内飲料水消費量の約20%をまかなう為に、上流の羽村堰で大量に取水されてしまうことであり、二つは、他の河川同様、6省と近隣自治体が複雑に絡んだ水行政下にあるということである。羽村取水堰より下流の多摩川の水は、下流に行くほど下水処理排水や浅川、野川などの支川の水の占める割合が大きくなり、当然ながら水質も良いものではなくなっている。川には色々な植物が育ち、生き物が生息しているにも拘らず、その川の水を、人間が独り占めみたいにして良いものなのかどう

か。第98号で涌井教授が、「弱くてスローな存在が身の回りに恒常的に現れてこそ都市が自然を取り戻したことになる。」と述べておられるが、源流等からの本来の自然の水が主流をなす川を取戻すことが多摩川流域での「人と自然の共生」につながって行くのではないか。ひとつの答えとしては、例えば、昨年7月の当財団主催のワークショップでも提案された、調布堰（丸子多摩川橋付近）での取水の復活である。これによって、自然の川の水を、人を含めたより多くの生き物が共有することが可能になり、それぞれの生がよみがえるのである。

しかしそれに伴い、他方では、水質の一層きめ細かい維持管理が必要となる。農山村部での合併浄化槽の使用促進、浄水機能の高度化やワンドを改良・活用した河川浄化の導入が欠かせない。また、水の循環そのものを改善する為に、各家庭での雨水浸透枳設置や中水利用の義務化、今は野放し状態の地下水の利用の制限、減反田への水はりの義務化、不耕起田稲作の奨励などは必要な取組みである。これらは従来の入組んだ縦割りと言われる水行政の枠組みではなし得ない。「人や自然に必要な川であるために必要なこと、なすべきことは何か」との視点で、多摩川を中心にした「多摩川流域コミュニティ」とでも呼ぶべき地域にとって必要なことややるべきことを発想すれば、比較的容易に答えが得られるのではないだろうか。

他所に比べて高い地域環境力を生かし、例えば地域通貨を発行して、お互いの活動の支援と連携を強め、「多摩川流域コミュニティ」の一層の強化を図ることによって、国内初の「水基本法」とでも呼べる「多摩川水宣言」なるものを創る。それは前述したような各種取組み、規制、義務を伴うものだが、それらを流域約430万人が守ることによって始めて、限りある水資源を将来にわたって安全かつ安定的に確保でき、人と自然が共生できる理念や哲学を持った地域づくりができることになる。

昨年の研究助成金贈呈式で挨拶された高橋東大名誉教授が、多摩川は常に国の河川政策のモデルであり続けてきたといわれたことが記憶に残っているが、実質的な水基本法の制定を、先ず多摩川流域から発信し、ここでもまた多摩川が、国策の良いモデルの嚆矢になれないものと想うのは幻想に過ぎないのであろうか。

基本財産の利子を元に活動する公益法人である当財団は、長引く低金利政策や本年末を目処に進められている公益法人改革論議などによって厳しい環境に置かれてはいるが、その中で、多摩川流域コミュニティの一員として、現在及び今後の役割は何か、それをどのように果たして行けるか、30周年を迎えるこの機会に、改めて良く考えてみたいと思っている。

(とうきゅう環境浄化財団 常務理事・事務局長)

● 財団からのお知らせ ●

2003年に完成した研究助成成果報告書〈一般研究〉8件の研究概要を紹介します。

環境教育、特にフィールドマナー（野外活動における倫理）の視点から捉えた多摩川の保全に関する研究

君塚 芳輝（淡水魚類研究者）

本研究は、研究者らが市民団体や各種学校等の依頼を受けて行ってきた多摩川における魚類観察会や水中観察会を中心にとりあげ、環境教育的側面における観察会の効果や心構え、フィールドマナーなどの留意点の整理、川に入る時の安全管理について研究を行った。

また、全国的な川に学ぶ社会の流れを紹介し、地域で川に学ぶ社会の構築のために、今後、どのように観察会を運営すべきかという点についての提案を行った。

多摩川中流部（本流）における子どもの川遊びと水辺行動についての実態調査

上田 大志（多摩川センタースタッフ）

現在、「多自然型川づくり」や「水辺の楽校プロジェクト」など、人といきものにやさしい川づくりが活発になってきており、子どもたちにもっと川に親しんでもらおうとする動きが全国的に広まってきている。しかし、今なお都市部の多くの子どもたちは、両親や学校から、川は危険な場所であるとして、同伴者なく子どもたちだけで川遊びに行くことを禁止されている現状がある。では、実際に多摩川で子どもたちが川遊びをしている例はどの程度あるのだろうか。子どもたちは川のどのような場所でどのように遊んでいるのだろうか。子どもたちの生活環境や川に対する意識はどのようなのだろうか。多摩川中流部をフィールドとして調査した。

本研究では、子どもたちの川遊びの実態を調査することによって、魅力的な川について考えるきっかけとしたい。

市民のための多摩川環境情報提供システムとその活用のあり方に関する調査研究

鈴木 聖子（エコロジカル野川実行委員会）

第1・2年度は多摩川環境情報提供システムに関する既存事例調査、多摩川環境情報データベース構築のための基礎情報・資料の収集・整理を行い、一般市民が利用しやすい情報提供のあり方を探った。収集した情報・資料のデータベース化、インターネット等一般市民が利用しやすい提供手法について検討した。それを

元に、第3年度はデータベースを構築し、インターネットで一般に公開する方法を探り、「行動する多摩川ファン」をふやしていくような、誰でも最新の多摩川環境情報を入手できるシステムについて検討した。

住民の眼で見つづけた多摩川の30年：蓄積データ解析による自然の変遷と自然観の変化についての研究

柴田 隆行（多摩川の自然を守る会代表）

日本で最初の住民運動型自然保護運動を32年間続けてきた「多摩川の自然を守る会」がこれまで実施してきた自然観察会および自然調査の記録をまず可能な限り一つに集め電子データ化し、公開できるものとした。同時に、西暦2000年の多摩川を記録する運動のうち住民参加型一斉調査を担当して、青梅万年橋から河口までの多摩川両岸全区間の利用実態調査ならびに河川環境現況調査を5回実施した。これら新旧のデータを対照させて、多摩川の自然環境の変遷を明らかにするとともに、市民の自然観の変遷をたどってみた。

多摩川の源流に位置する奥多摩御前山における自然水とし尿の調査研究

山本 久子（東京都山岳連盟）

御前山は多摩川の支流、栃寄沢と北秋川に挟まれた標高1405mの山である。4月中旬から末頃迄、山の中腹から山頂にかけてカタクリの花が咲きみだれる。この時期、この花を觀賞するため登山者が殺到する。山頂付近で大勢の人々が生理現象による用足しをする。避難小屋前の水場である湧水が大腸菌に汚染され、いろいろな面から考察を重ね、し尿のしみ込みとの因果関係を調査する意向で調査研究をはじめた。4月から翌年3月まで毎月御前山に登り、水質調査をする。

この結果、カタクリの花の開花シーズン及び盛夏後の紅葉シーズンに汚染と思える変化が見られた。

地質野外実習地としての多摩川中流域および狭山丘陵に分布する上総層群の露頭の現状とそれに基づく教材開発

馬場 勝良（慶応義塾幼稚舎教諭）

東京都南部を流れる多摩川中流とその支流域および狭山丘陵地域には、第四紀更新統の上総層群が露出する。そこは、露頭の人工的な改変が少なく、露出状態

が良好に保たれていることや平坦地であるため多くの児童・生徒を引率できるなど利点があり、地質野外観察の場所として注目されている。

多摩川中流域と狭山丘陵地域の露出状態を調査し、その結果に基づいて地質野外実習の教材を開発した。

多摩川流域の石垣調査

岡崎 学 (羽村郷土研究会代表)

多摩川流域での所在調査の主なものは、①歴史的に価値あるものとしては、奥多摩町日原倉沢神社跡、奥多摩川野の吉野家跡、青梅市二俣尾の海禅寺、青梅市大柳の荒井家、羽村市羽東先の羽村堰、青梅市宮の平の石灰工場跡ほか。②景観上すぐれたものとしては、奥多摩町日原の東日原付近、青梅市吹上の切り通し、福生市福生の玉川上水田村分水付近ほか。③規模が多きいものとしては、青梅市二俣尾の青梅街道の青渭通り入り口付近、青梅市河辺の段丘崖、羽村市東先の玉川上水取入れ口ほか。④平成時代に積まれものとしては、青梅市の梅郷、黒沢川、羽村市の間坂の石垣などがある。

以上の石垣のうち、④は、多摩川の石、砂利採取禁止のため、多摩川の石を用いていないと思われるが、地形や景観に配慮して意図的に石垣を採用したことを評価した。

多摩川源流部の淵・滝・沢・尾根等の地名とその由来に関する調査研究

中村 文明 (多摩川源流研究所所長)

2000年3月から、「多摩川源流絵図」(小管版)を作成するため、調査活動を開始した。この活動は、中村所長を中心に、小菅村の広瀬村長、古家助役、佐藤小菅村総務課主幹・源流研究所事務局長をはじめ小菅村教育委員会の降失教育長、加藤教育課長など小菅村役場の全面的な協力・援助のもと、村の高齢者学級の積極的な協力を得て進められてきた。また、源流域の実踏調査には、多摩川源流観察会、地元猟友会の会員、小菅村役場の職員の積極的な協力が図られてきた。その後、小菅川の源頭まで幾度も踏査し、酒井巖さんなど地元の長老の方に一緒に現場を確認していただいたこともしばしばあった。また、小菅村の8地区に関しては、白沢の奥秋信俊さん、奥秋忠俊さん、橋立の木下三吉さん、木下清さん、小永田の船木常男さん、田元の亀井常成さん、東部の加藤亀吉さん、加藤信休さん、横瀬健さん、川池の小泉春好さん、中組の船木四郎さん、田中利数さん、長作の守重洋作さんなど多くの方々から小字の由来など貴重な話を聞き取り、調査報告書をまとめ、その成果を絵図に落とし「源流絵図」小菅版を完成させていった。

《寄贈文献の紹介》

● 「水のころろ誰に語らんー多摩川の生態」

著者 小倉紀雄 2003年

(財)リバーフロント整備センター

本書は河川生態学術研究会多摩川グループ(代表小倉紀雄)が多摩川永田地区(永田橋～羽村大橋間約1.6km)の生態調査並びにハリエンジュの伐採とその跡地へのカワラノギクの播種・育成実験等を実施した研究成果である。また、本書190頁の約半分を多摩川全体の歴史を豊富なデータと写真を用いて解説されている。

- 発行日 平成16年3月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150-0002 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03) 3400-9142
FAX (03) 3400-9141

ホームページ <http://home.q07.itscom.net/tokyuenv>

*印刷所 雄文社 〒330-0061 さいたま市浦和区常盤9-11-1 TEL (048) 831-8125

